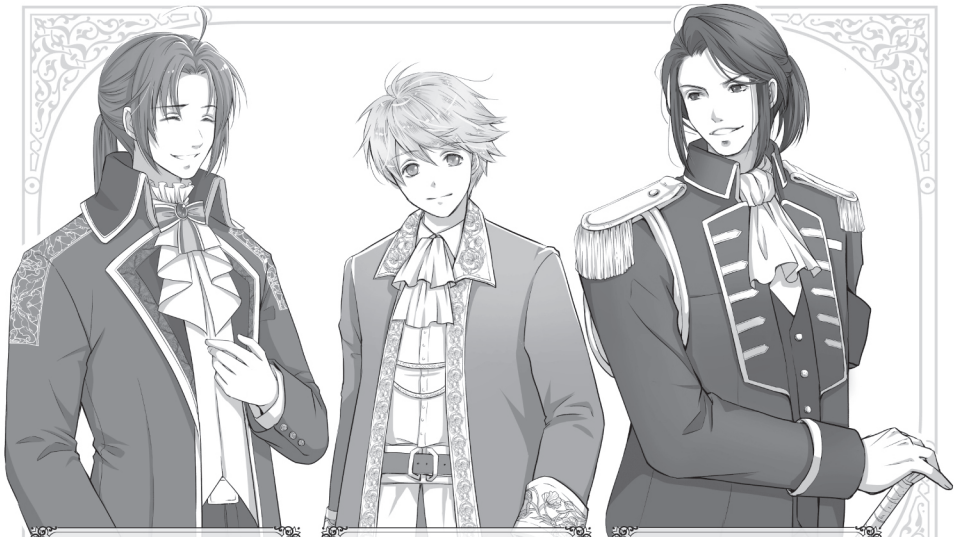
男色（疑惑）の王子様に、
何故か溺愛されてます!?



クラレンス

オズワルドの兄にあたる、
セーヴェル王国の王太子。
穏やかな性格で責任感が強い
ため、細かいことで悩みがち。

ブラッドリー・アルフォード

ローズマリーの兄で王太子の
側近。職務中はポーカーフェイス
だが、おおらかな性格で妹を
可愛がっている。

エイブラム・オルガレン

セーヴェル王国の侯爵にして
オズワルドの側近。
闊達な性格で
令嬢達から人気が高い。

ナサニエル・ガーランド

王城にある書庫の司書官。
本来ならもっと上の職種に
就ける伯爵家の人間だが、
訳あって書庫勤めとなっている。

エディス・アータートン

セーヴェル王国の子爵夫人。
ローズマリーとは親友。
明るくさっぱりとした
言動が多い。

アスキス

セーヴェル王国の公爵にして
騎士団総帥。
短気でいつも眉間に
皺が寄っている。

登場人物紹介

CHARACTERS

オズワルド

セーヴェル王国の第二王子。
騎士団に所属している。
真面目で有能だが、ローズマリーに対しては
天邪鬼なところがある。令嬢達の間で、
「部下のエイブラムと道ならぬ恋を
育んでいる」との噂があるが……

ローズマリー・アルフォード

セーヴェル王国の侯爵令嬢。
オズワルドとは幼馴染み。
年上の男性にばかり憧れや淡い恋慕を
抱いていたが、とある事件をきっかけに、
同い年のオズワルドと婚約を結ぶことに
なってしまう。楽天家で思い込みが激しい。

目次

男色（疑惑）の王子様に、何故か溺愛されてます!? 7
番外編　再び疑惑の王子様 223

男色（疑惑）の王子様に、
何故か溺愛されてます!?

プロローグ

「ああっ、だめっ……そんな、奥……っ」

ローズマリーの悲鳴のような声が、室内にこだまする。

装飾をほぼ深紅で統一した室内には、淫靡な空気が漂っていた。寝台の脇には脱ぎ捨てられた衣服が散らばり、床の上で黒い影を作っている。

その中で唯一白いシーツの上には、ローズマリーの赤みのある長い金髪が広がり、枕元の淡い光を受けて輝いていた。

その髪が揺れるたび、ぐちぐちと音が立ち、彼女の口からは喘ぎがこぼれ落ちる。視界がゆがみ、自分の身体が奏でる淫らな音を聞きながら、ローズマリーは今にも飛んでいきそうな意識をなんとか保とうと、目の前の逞しい体に縋り付く。

「駄目って……そんなことはない。ほら、こんなにぬるぬるで……きゅうきゅうしてて……っ」

ぐっと腰を突き込んで、にやりと口の端を上げたのは、セーヴェル王国第二王子。つい先日ローズマリーの夫になったばかりのオズワルドである。

「ほら、ローズマリー、わかるか……ココが、お前の一番奥だ」

「わっ、わからなっ……だ、だめえ、おかしくなっちゃ……うっ」

こつこつと腰を動かし、奥を叩くと同時に、オズワルドの指先がローズマリーの乳首を捏ねまわす。途端に、身体の奥がぎゅうっと胎内の肉棒を喰い締めた。うっとりと目を細めたオズワルドが、それに耐えるように歯を食いしばる。

甘い悦楽に、ローズマリーの白い肌は汗ばみ、吸い付くような手ざわりでオズワルドを楽しませているようだ。だが、そんなことに気が付く余裕などない。

――オズワルド……どうして、こんな風にするの……

じわ、と溢れた涙が頬を伝う。

――本当は、こういう風に睦み合いたい方が、別にいるのに……

ローズマリーにもわかっている。オズワルドはこうするよりほかにないのだ。それが、彼に課せられた義務なのだから。

けれど、こんな風に情熱的に抱かれると、錯覚してしまいそうになる。

オズワルドの手が、ローズマリーの細い腰を掴むと、一気に抽送を始めた。そんなことをされてしまえば考えていたことが霧散して、ローズマリーはもはや悦楽に啼くことしかできない。

胸の先端に吸い付かれて、目の前に星が散る。散々なぶられていた乳首は、すでに充血しきっており、ざらついた舌がそれを舐めるたびに小さな法悦がローズマリーを襲う。

「あっ、あっ……やっ、オズワルド、やだ、やだ、こわいの……っ」

「こわくないから、ほら……」

オズワルドの唇が、ローズマリーに優しく口付けを落とす。ちろちろと舐められて、教え込まれた通りに唇を開けば、そこから厚い舌が侵入してきた。
舌を絡め、擦り合わせながら、オズワルドの熱杭が蜜洞を行き来する。その硬さと熱さに翻弄されて、ローズマリーはびくびくと背筋をそらした。離れた唇を、オズワルドが追ってくる。
「駄目だ、ローズマリー、俺は……」
がつがつと奥を突き上げながら、オズワルドは熱に浮かされたように囁きかける。返事はさせないとばかりに、再び口腔内を貪られ、ローズマリーの身体は抑えきれない快楽に攫われる。
「んっ、んんっ……！」
絶頂の波に襲われ、ローズマリーの中がきゅうきゅうと収縮を繰り返す。それに誘われるように、オズワルドが精を放った。
だが、ローズマリーの胎内にある彼の肉棹は、いまだに衰える気配がない。
思わず夫を見上げたローズマリーに、オズワルドが微笑みかける。だが、その瞳にはぎらぎらと欲望が煮えたぎっていた。
ひっ、と息を呑んだローズマリーに構わず、オズワルドが再びゆっくりと動き出す。彼の放った精と、自身が溢れさせた蜜液が絡み合い、ぐっちゅぐっちゅと淫猥な音が響き出した。
達したばかりで敏感な粘膜を遠慮なく捏ねまわされ、ぐったりと弛緩していたローズマリーの身体に再び熱が灯った。
「あ、だめえ、今、達したばかりなの……っ」

「そうだろうな、すごく締め付けてくる」
相対するオズワルドの口調には、いくらか余裕が感じられた。だが、ぎらつく双眸はじっとローズマリーを見つめ、その反応を余すところなく見ようとする。
視線と、身体の奥の熱と、その両方に責められて、ローズマリーは涙を流し身をよじった。その身体をしっかりと捕まえたオズワルドの手が、つながっている場所のすぐ上、ローズマリーの一番敏感な部分を嬲り出す。
溢れる蜜を絡められ、くりくりと摘まれると、ローズマリーの口からはもう、意味のない嬌声しか出てこなくなってしまう。
「やっ、おかしくなる、おかしくなっちゃう……っ」
「いくらでも、おかしくなれよ……っ」
オズワルドの肩の下まで届く黒髪は乱れ、首筋にも頬にも張り付いている。それが壮絶に色っぽく、そして見つめる視線の熱さがローズマリーを煽り立てた。
「いやあ、だめ、だめえ、もう、イっちゃ……」
「まだまだ、もう少し我慢しろ」
大きく捏ねるように蜜壷を穿ち、オズワルドが非情な宣告を下す。いつものローズマリーであれば、その偉そうな態度に一言物申すところだ。
だが、今のローズマリーは、その言葉に従順になってしまう。
なんとか快感を逃そうと、白いシーツをぎゅっと掴む。しかしその手は、眉をひそめたオズワル

ドの手に攫われた。縋るようにその手を握りしめ、だんだんと大きくなる悦楽に耐える。
「あ、あ、あっ」
「ん、ローズマリー、俺も、俺も……っ」
腰を奥へと打ち付けながら、オズワルドが悩ましげな声を上げた。ごりごりと大きく太いもので膣壁を擦られ、ローズマリーの身体に大きな波が押し寄せる。
頤をそらし、中が絞り上げるようにオズワルドの熱杭を締め上げるのを感じながら、ローズマリーは真っ白な空間に放り出された。
「絶対、離さないからな……っ」
薄れゆく意識の中で、低く囁くオズワルドの声が、遠く聞こえたような気がした。

第一話　すべての始まり

話は数か月前までさかのぼる。
壁一面に描かれた精緻な壁画に、美しい装飾を施された天井。吹き抜けになった広間は開放感があり、大勢の人々が集まっても息苦しさを感じることのない設計になっている。
ところどころに置かれた彫刻も、いずれ劣らぬ一級品ぞろい。
さらに圧巻なのは、周囲を照らす大きな燭台だ。これに灯されているのは魔術の光で、それ自体はこの国、セーヴェル王国では珍しくもない代物である。しかし、これだけ大きなものになると用意するのは相当に難しい。まさに、贅を尽くした逸品である。
――こんなときでなかったら、ゆっくり鑑賞したいくらいだわ。
高級品で溢れかえるセーヴェル王国の王城。その大広間で、ローズマリー・アルフォードは踊っていた。
「なんでこうなったのかしら……」
「……往生際の悪い奴だな」
ステップを踏みながら、ローズマリーは唇を噛みしめてダンスの相手を見上げた。肩の下まで伸ばした黒髪を一つにまとめ、銀糸の刺繍も鮮やかな紺色のジュストコールを身に着けた姿は、確か

に恰好いい。踊る相手として申し分ないだろう。それは認めよう。
だが、その腕の中にいるのが自分である、という現実に、ローズマリーはいまだについていけていなかった。
セーヴェル王国の第二王子、オズワルド。
闇夜のような黒髪に、深海を思わせる深い青の瞳をした、美しい青年。それが彼だ。その彼と今日、ローズマリーは婚約披露を行っている。
そのためのファースト・ダンスだ。婚約者同士としてホールの中央に陣取った二人は、一曲目を二人だけで踊ったあと、続けて二曲目に入っていた。
二曲目からはほかの参加者たちもダンスを始めており、二人の婚約を祝ってすれ違いざまに微笑みを投げかけてくる。
「どうして……」
「どうしてもこうしてもあるか」
ひそひそと交わされる会話は、おそらく楽の音にかき消されてほかの人には聞こえないだろう。はたから見れば仲睦まじい婚約者そのものだが、会話の内容は甘くもなんともない。
はあ、と一つため息をついたところで、突然くるりと身体を回される。ぐ、と足に力を入れてそれを凌ぐと、にやりと笑ったオズワルドが至近距離からローズマリーの顔を覗き込んだ。
「お、やるな」
「もう……！　転んだらどうするの」

唇を尖らせたローズマリーに、オズワルドは少しだけ肩をすくめてみせた。悪戯っぽく眉を上げた彼の、からかうような声音がローズマリーの耳に届く。
「これくらいで転ぶのか？　ダンスの名手と呼ばれたお前が？」
「そんなわけないで、しょ！」
この日のために誂えた深い青のドレスの裾を翻し、一歩踏み出すと、ローズマリーは挑戦的な瞳でオズワルドを見上げた。薄い青をした煌めく瞳をわずかに細め、彼女は口元に笑みを浮かべる。
「見ていなさい……振り回してあげる」
「お手柔らかに頼む」
ふん、と鼻を鳴らしたオズワルドの手が、ローズマリーの赤みのある金の髪をそっと肩から払う。にやりとした笑みを浮かべると、オズワルドは楽団にちらりと視線を走らせて、合図を送った。途端にゆったりとした曲調が、だんだんと速度を上げはじめる。
その曲に合わせて、彼の足がそれまでのものよりも複雑なステップを踏み始めた。
「……腕を上げたわね」
「いつまでも苦手とは言ってられなかったんでな」
軽快にステップを踏み、微笑み合う。周囲の目には、想い合う恋人同士のように見えたことだろう。
事実、この婚約披露から三か月後には二人の結婚式が予定されている。
第二とはいえ、王子の婚姻だ。普通なら、婚約を公示してから一年は準備期間に費やされるはず

である。だというのに、こうも式を急ぐのには理由があった。
――ことは、二週間前までさかのぼる。
その日、ローズマリーはいつものように第二騎士団の鍛錬を見学するために王城へと向かっていた。彼女の目的は、第二騎士団団長、エイブラム・オルガレン侯爵だ。
今年三十五を迎えてなお独身。鍛え上げられた体躯と精悍な顔立ち、そしてその身分も相まって、世の令嬢方の人気を集めている。
オルガレン侯爵は、持ち込まれる縁談も星の数ほどと言われているが、そのすべてを断り独身を貫いていた。本人は、第二王子に剣を捧げた身であるから、と話しているが、社交界の噂では、若い頃に恋人を亡くして操を立てているとか、報われぬ恋に身を窶しているとか囁かれている。
今年十九になったばかりのローズマリーからすれば、かなり年上になるだろう。だが、そんなことはローズマリーにとって些細なことだ。
昔から、ローズマリーは年上が好きなのである。淡い初恋は幼馴染のお兄ちゃん。その後も成長するにつれて、淡い恋を何度も体験してきたが、対象はやはりみな年上だ。
――だって、同じ年頃の男の子って苦手なんだもの。
ローズマリーは、馬車に揺られながらため息をついた。小さい頃、一緒に遊んだ黒髪の少年の姿を思い浮かべて首を振る。
思えば、同世代の男の子が苦手になったのは、間違いなく彼のせいだ。
『なあ、あっちを案内してやろうか』

あれは、確かまだローズマリーが五歳のときのこと。両親に連れられて、ローズマリーはとあるお茶会に出席していた。
そこで出会ったのが彼だ。
よくわからない会話だらけのお茶会に退屈しきっていたローズマリーを連れ出してくれたことには感謝している。だが、そのあとが悪かった。
『ほら、これをやるよ』
にっこりと笑った少年が差し出した手のひらに乗せていたのは、大きな芋虫。
きゃあ、と大きな叫び声をあげて後退ったローズマリーに、彼は目を丸くしてさらにずいっとそれを近づけてきた。
『ほら――』
彼はまだ何か言っていたが、その後のことは、もうよく覚えていない。ぱたり、と倒れたローズマリーが次に気付いたときには、室内の長椅子に寝かされていた。その顔を、やはり黒髪の――先程の彼よりも年上の少年が覗き込んでいる。
『あ、気が付いた？　ごめんね、弟が……』
そう微笑んでくれた少年は、先程の彼と面差しが似ていた。だが、雰囲気は大人びていて、ローズマリーはぽわんと頬を赤らめて首を振り、にっこりと微笑んだ。
これが、ローズマリーとオズワルド、そして彼の兄である第一王子クラレンスとの出会いである。
そして、ローズマリーの初恋は優しく付き添ってくれたクラレンスで――このときから、ローズ

マリーの淡い恋のお相手は、みな年上ばかりになった。
だが、その後も何故かことあるごとに、ローズマリーとオズワルドは顔を合わせる機会が増えてゆく。ローズマリーの父が宰相で、国王と懇意にしていたこと、二人が同じ年齢であることなどが理由だったのだろう。ローズマリーの兄、ブラッドリーがクラレンスの学友だったこともそれに拍車をかけたのかもしれない。
アルフォード家は侯爵の位を戴く高位貴族だ。あわよくば二人を結婚させよう、という目論見もなくはなかっただろう。
だが、二人の相性は最悪だった。
ローズマリーとオズワルドは、寄ると触ると口論を繰り返し、いつしか二人は犬猿の仲として有名になってしまったのである。
『もう少し、お淑やかにできないものか』
そう父が嘆いていたことまで思い出して、ローズマリーは憂鬱な気持ちになった。
オズワルドさえ絡まなければ、ローズマリーはどこに出しても恥ずかしくない、気品ある侯爵家のご令嬢でいられる。だが、オズワルドの前では何故かその仮面がはがれ、気の強い一面が前に出てしまうのだ。
――まあ、小さな頃から喧嘩ばかりしている相手に、今更ねえ……
再びローズマリーがため息をついたとき、馬車がゆっくりと停車する。王城の車寄せに着いたのだと気が付いて、ローズマリーは嫌なことを忘れ、うきうきとして大きなつば広の帽子をかぶると、

鍛錬を見学しに向かうことにした。
ほかにも何人か、見学に向かう令嬢の姿が見える。その一番後ろを目立たぬようについていき、ローズマリーはいつもの定位置に腰を下ろした。
そこへ、ぬっとあらわれた人影がある。
「ローズマリー、お前、また来たのか」
「あら、オズワルド殿下には、ご機嫌麗しく……」
ローズマリーの定位置は、観覧席の一番後ろの目立たない場所だ。ここからひっそりと訓練を眺めるのが、いつものスタイルである。
大きなつば広の帽子をかぶっていることもあって、ローズマリーの正体に気が付く者は少ない。それなのに、何故かオズワルドはいつもすぐにローズマリーを見つけてしまう。
帽子が目立つのか、と小さな帽子をかぶってきたこともあるのだが、そのときには馬鹿にしたような顔で日傘を差し出されたものだ。一応お礼を言ったところ、「倒れられでもしたら兄上に迷惑がかかるからな」とツンとした態度で言われたことは記憶に新しい。
まあ、ここでローズマリーが倒れでもしたら、一番に連絡が行くのは城に常駐している兄ブラッドリーのところだろう。彼は今、王太子の側近として常にクラレンスの傍にいる。ブラッドリーが傍を離れることになれば、当然王太子の業務は滞るわけで、ローズマリーとてそれくらい承知していないわけではない。
別にお前のためじゃないぞ、と暗に言われたわけだが、そんなことは百も承知だ。しかし、ロー

ズマリーの体調を慮ってくれたのは事実だから、あえて口答えはしなかった。
「お前に殿下、なんて呼ばれると、なんだか背筋がぞわっとするな……」
「仕方がないでしょう、お父様が最近うるさいのよ」
わざとらしく震えてみせたオズワルドに向かって、ローズマリーは肩をすくめた。その隣に、オズワルドは許可も取らずにどっかりと座り込む。
だが、それもいつものことだ。
「アルフォード侯爵か。まあ、あの方はわりに固いところがあるからなあ……」
ローズマリーの父、アルフォード侯爵の姿を思い浮かべたのだろう。オズワルドの表情がわずかにげんなりとしたものになる。
幼少期から親交のある二人は、当然互いの親にもよく会うわけだが、アルフォード侯爵は何かにつけては優秀な兄王子を引き合いに出して、オズワルドにも勉学に励むよう発破をかけていた。それゆえ、苦手意識があるのだろう。
くす、と笑ったローズマリーは、訓練場に視線を向けて呟いた。
「それにしても、第二王子って暇なの？　私がここに来ると、いつもいるけど」
「第二騎士団は俺付きだからな。エイブラムがここに来る日は、来なければならないだけだ」
俺も鍛錬をするしな、と続けられてローズマリーは肩をすくめた。それはもちろん知っている。王子付き騎士団の団長は、剣の指南役を兼ねているのだから。だが、その鍛錬のあるはずのオズワルドに、こうしてエイブラムを見学できる機会をいつも邪魔されるのはおかしな話だ。

ローズマリーの視線の先では、エイブラムがほかの団員たちに稽古をつけている。相変わらずほれぼれするような剣筋だ。うっとりとした視線を送るローズマリーに、かすかな舌打ちの音が聞こえた。
「……お前、本気なのか？」
「え？　何が……？」
しばらく黙ってローズマリーを見つめていたオズワルドが、ぼそりと呟いた。エイブラムの雄姿に夢中になっていたローズマリーは、何を言われたのかよくわからなくて首をかしげてオズワルドに向き直る。
すると彼は、頬を少しばかり赤らめて訓練場の――エイブラムを見つめていた。
――ん？　ま、まさか……？
昨日友人から貸してもらった、ある本を思い出して、ローズマリーはうろたえた。
本自体は、どうということもない流行りの冒険もので、主人公はとある事情から身分を隠して旅をする貴族の青年だ。剣の腕が立つことから、冒険者に身を窶している。
そして、その青年とともに旅をするのが腹心の部下でもある魔術師だ。旅が進むにつれて明かされる謎と、二人の身分を超えた友情が話題を呼んでいる。
もちろん、物語の主人公とその相棒だけあって、二人とも誰に勝るとも劣らぬ美丈夫として描かれているのだが、何故かこの二人、その巻ごとに登場するどんな美女とも恋仲にならない。それどころか、巻を追うごとに二人の信頼は厚く、ゆるぎないものに変わっていく。

それゆえか、一部のファンの間からは二人の間を怪しむ声があがっている――というありさまなのだ。

それに加えて――ローズマリーはオズワルドとエイブラム、二人にまつわる「とある噂」を思い出してしまい、ほんのりと頬を染めた。

意識してしまうと、俄然、自分のこの思い付きが正しいような気がしてきてしまう。

――そ、そんな……でも、まさかでしょう……？

頬を赤らめたオズワルドの視線の先にはエイブラム。観客席から起こる黄色い声援に応えて手を振っている姿を、唇を尖らせて見ている。

オズワルドとエイブラムの仲が良いことは、もちろん付き合いの長いローズマリーはよく知っていた。時折、二人が視線だけで会話をするシーンを何度も間近で見たものだ。

口元に手を当てて、ローズマリーはオズワルドの横顔をじっと見つめた。これはもしかしたら嫉妬の視線なのではないだろうか。

自分というものがありながら、ご令嬢方に愛想を振りまくエイブラムに対する、だ。

気付いてしまった衝撃的な事実を胸に秘め、ローズマリーはオズワルドとエイブラムを交互に見比べた。それに気付いたのか、エイブラムがこちらに視線を向けると、口角を上げる。すると、オズワルドはぷいと顔を逸らしてしまった。

――どう見ても、これは……

男二人のそんなやりとりに、ローズマリーは何故だかどきどきしてしまう。生憎、ローズマリーはそちらの方面には詳しくはないのだが、友人たちが「あの騎士さまとあちらの騎士さま、随分と距離が近いと思わない？」などと盛り上がっていたことを思い出す。

このときやり玉にあげられたうちの一組が、オズワルドとエイブラムなのである。もちろん、噂になっているだけで確証があるわけではない。ただ、二人の距離がほかの人たちに比べて近いのは、動かしようのない事実である。そのせいか、そういった趣味趣向の持ち主である令嬢たちの間では、二人の関係はほぼ公然の秘密扱いになっていた。

一度そう思ってしまうと、噂を信じていたわけではないローズマリーの目にさえ、オズワルドの瞳はまるで恋する男のそれに見える。

いや、ローズマリーでさえ、本当はそうなのではないか、と疑っていた節もあるのだ。だから、すっかりその考えに取りつかれてしまった。

――まさか、オズワルドがオルガレン団長に恋をしているだなんて……！

これを教えてあげたら、きっと友人たちは色めきたつに違いない。だけど、とローズマリーはそっと胸を押さえた。

オズワルドは、セーヴェル王国の第二王子である。ということは、王家の血を絶やさぬために婚姻して子を残さなければならない立場だ。

実らぬ想い。いや、もしエイブラムの方もオズワルドを憎からず思っていたとしても、決して結ばれず――オズワルドは誰かほかの女性と結婚せねばならない。

じわ、と熱いものが込みあげてきて、ローズマリーは目を伏せた。

ローズマリーとて、こうして淡い憧れを胸にエイブラムを見るために騎士団の鍛錬を見学しに来ているわけだが、実際に結婚となれば別の話だ。貴族の子女たるもの、結婚相手は親が決める。ローズマリーの意志はさほど重要ではない。

それと同様に、今こうして見学に訪れている令嬢のほとんどが、おそらくは家のために結婚をする。騎士団の鍛錬を見学する自由は、それまでのものだ。

貴族間の婚姻なんて、そんなものである。ごくまれに、恋に落ちた相手と結婚できる幸運な令嬢もいるが、それはほんの一握り。

まあ、中には親の決めた婚約者と仲睦まじい結婚生活を送るものもいるにはいるのだけれど。

――私もせめて、そちら側に入りたいものだわ。

ふう、とため息をついたローズマリーは、視線を感じて顔を上げた。すると、オズワルドが訝しげな顔でこちらを見ている。

「お前……」

「な、何よ」

先程、オズワルドに同情していたせいだろうか。なんとなく勢いがそがれて、いつもの軽口も出てこない。そんなローズマリーに、オズワルドはますます眉間のしわを深くした。

「……ローズマリー、このあと時間あるか？」

「え？　ええ、まあ」

「じゃあ、ちょっと茶でも飲んでけよ。ここで待っていてくれたら、あとから迎えに来る」

その言葉に、ローズマリーは珍しく素直に頷いた。オズワルドは立ち上がると、そんなローズマリーの頭をぽんと叩き、その場をあとにする。

「……オズワルドだって顔は良いのに、なんでここにいても騒がれないのかしらね」

その後ろ姿を見送りながら、ローズマリーはふと思いついて口にする。

そばで一部始終を見ていた侍女は一瞬片眉を上げたが、賢明にも口をつぐんだままだった。

さて、オズワルドとお茶をするのなら、場所はどこになるのだろうか。小川のそばの四阿なんか、この季節なら涼しげでいい。そういえば、ゆっくり話をするのは久しぶりになる。

こうして鍛錬を見学に来るたびに会っているから、まったくそんな気がしていなかったのだけれど。

――それにしても、いったいどういう風の吹きまわしかしら。

突然の誘いの理由が見当たらず、ローズマリーは首を傾げる。だが、別に断る理由もない。

「そうだわ、悪いけれど、頼まれてくれるかしら」

ふと思い立って、ローズマリーは傍らの侍女を見上げ、自宅への言伝を頼んだ。帰りは兄に送ってもらうことにしようと、そちらにも寄るようにお願いをする。オズワルドはいい顔をしないだろうが、たまには兄ともゆっくり話をしたいのだ。それくらいは、クラレンスも認めてくれるだろう。

あとになって思えば、この判断がまずかった。

「おい、ローズマリー、行くぞ」

「あ、オズワルド……思ったより早かったわね」

湯を使ったあと急いで来たのだろう、髪が少し濡れている。もともと艶々としている黒髪が、首筋に張り付いているのが艶めかしい。

暑さのせいか、シャツのボタンを二つほど外しているのが目に入って、ローズマリーは思わず視線を逸らした。こんな姿は、兄のものでさえ見たことがない。

思わず赤くなったローズマリーに構わず、オズワルドはさっさと歩きだした。

「あれ、いつもの……侍従はどうしたのよ」

「先に戻らせた」

ほら、何してるんだ、と伸びてきた手に腕を掴まれ、ローズマリーは唇を尖らせた。同じ年だから十九になるというのに、淑女の扱いのわかっていない男である。

——これだから、モテないんだわ。顔はめったにないほどの美男子に育ったっていうのに……惜しいこと。

肩をすくめると、ローズマリーはおとなしくオズワルドに腕を引かれるままに歩いていく。

王族の生活する棟は、鍛錬所から少し遠い。衛兵に挨拶をして、王族専用の門をくぐり、渡り廊下を歩く。初夏の爽やかな風が木立の間を抜けて大変心地良い。しかし、歩いているあいだ珍しく無言のオズワルドが気になって、ローズマリーはそれをゆっくりと感じる暇もなく彼の部屋へと引っ張り込まれた。

オズワルドの部屋を訪れるのは、いつぶりだろう。幼い頃はよく来ていた、というか連れてこられていたのだが、いつの頃からかオズワルドと会うのは王城の中庭の四阿だとか、庭園のテラス席だとかになっていた。けれど、最近はそれもごく稀だ。

久しぶりに見る部屋は、ローズマリーの記憶にあるものとはだいぶ印象が違う。深い青を基調としてまとめられた室内は、品があって落ち着いていた。

「なんというか……だいぶ男らしい部屋になったわね……」

「いつの頃と比べてるんだ」

手に持っていた上着を椅子の背もたれに放り投げると、オズワルドは呆れたようにため息をついた。

勧められるままに向かいにあった長椅子に腰かけると、幼い頃からの顔なじみの侍女がお茶の支度をしてくれる。ありがとう、と声をかけると、老齢の侍女は微笑んで頭を下げた。

「悪いが、ちょっと席を外してくれ。内々に話したいことがある」

「かしこまりました」

最後に皿に盛りつけられたクッキーを置くと、老侍女はさっくりと退出していった。先に戻っているはずの侍従の姿もなく、ローズマリーは首をかしげる。

ここまで人払いをして、自分にしたい話とはいったいなんなのだろう。そんなに人には聞かせられない話なのだろうか。

——あ、もしかして。

ピンときて、ローズマリーは少しだけ姿勢を正した。もしかしたら、話というのはエイブラムのことではないだろうか。

つまり――その、恋敵宣言をされるのではないか、とローズマリーは考えたのである。
いや、もしかしたら、エイブラムとはすでに恋仲であるから諦めろ、と宣告されるのかもしれない。
どちらにせよ、確かに誰にも聞かれたくない話ではあるだろう。
セーヴェル王国は同性愛には割合寛容な国ではある。だが、同性同士の結婚は認められていないし、寛容であっても歓迎されるものではない。特に、貴族の間ではどちらかといえば忌避されている。
理由は簡単だ。同性同士では子を成せない。あとを継ぐ者がいなくなるからである。
だが、妙に神妙な顔つきになったローズマリーを見て、オズワルドは怪訝そうな顔をした。
「なんだお前、今日は妙にしおらしいな。なんだか調子が狂う」
「どういう意味よ」
「そのまんまの意味だよ。……なんかあったか？」
逆にそう問いかけられて、ローズマリーはぶんぶんと首を振った。特に何も変わったことはない。いや、あったといえばあったのだけれど、本人が話をする前に口に出すのはさすがに憚られる。
とにかく、いつそれを告白されてもいいように、心の中で準備をする。さあ、いつでも来い、と覚悟を決めて、ローズマリーは正面からオズワルドの顔を見た。
「その、ショックを受けずに聞いてほしい」
ローズマリーの視線を受けて覚悟を決めたのか、オズワルドは神妙な口ぶりで話し始めた。いつ

の間に飲んだのか、ティーカップの中身はすでに空になっている。
老侍女が置いていってくれたポットを手に取ろうとすると、オズワルドは首を振って押しとどめた。
「いや、いい。先に話をしてしまおう。実はな――結婚が決まった」
「え、ええ？　早くない……？」
目を瞬かせて、ローズマリーは危うく出そうになった素っ頓狂な声を引っ込め、なんとか普通の声音で問いかけた。
オズワルドは十九歳。男性の結婚適齢期はまだ先だ。そもそも、オズワルドの兄であるクラレンスでさえ、婚約すらしていない。
「……早くはないだろう、遅すぎたくらいだ」
「遅いって……そんなことないでしょう……」
困惑して、ローズマリーは視線をさまよわせた。女性の適齢期が近いローズマリーでさえ婚約者が決まっていないというのに、それよりも先にオズワルドが結婚するなんて。
――ん？　でも、なんでそれが「ショックを受けず」になるの？
いや、確かにショックといえばショックかもしれない。ローズマリーは侯爵令嬢のくせにいまだに婚約者もなく結婚の予定がない。だというのに、適齢期前のオズワルドの方が結婚するというのだ。
だが、その話をわざわざローズマリーにする意味もわからなかった。どうせ王子の婚約ともなれ

ば、近日中に国中に通達が出る。前もって言ってくれたのは、幼馴染ゆえの気遣いか、それとも自慢か。
　問題はもう一つあった。もちろん、オズワルドの想い人、エイブラムだ。彼はこのことを知っているのだろうか。
「……団長はご存じなの？」
「は？　ご存じも何も、そりゃいの一番に知ってるだろうよ」
　ふん、と鼻を鳴らしてカップを手に取ったオズワルドは、中身が空なことを思い出したらしくそれをソーサーへと戻した。代わりにクッキーを一つ手に取ると、大きく口を開けて放り込む。それからちらり、とローズマリーの様子を窺った。
　だが、自分の考え事に没頭していたローズマリーは、そんなオズワルドにまったく気付いていない。
「その……オルガレン団長は納得されているの？」
「納得も何も……言ってきたのはエイブラムだぞ？　なんだ、さっきから……お前、ショックじゃないのか？」
　もう一度カップを手に取って、オズワルドは諦めたように自分でポットからお茶を注いだ。一口飲みこむと、ローズマリーに視線を戻す。
「別に、ショックではないけど……」
「なんだ、その程度か」

　面白くなさそうな顔になったオズワルドだったが、口の端が微妙に上がっている。ひとつ肩をすくめると、もう一枚クッキーを手に取り、今度は半分ほど齧った。もぐもぐと咀嚼しながら、うまいな、などと呟いている。
　だが、ローズマリーの頭の中は別のことでいっぱいだった。エイブラムから言い出した、ということは、つまりこういうことか。
『オズワルド殿下、どうか私のことにはかまわず……』
『何を言う、エイブラム』
『所詮は報われぬ想いなのです。殿下は子を残さねばならぬ御身。どうか』
　――泣ける話じゃないの！
　ローズマリーは握りこぶしを握って立ち上がった。
「オズワルド、あなた本当にそれでいいの？」
「は、はあ……？　俺ぇ……？」
　鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、オズワルドは突如立ち上がったローズマリーを見上げた。深い青色をしたオズワルドの瞳が、困惑に揺れている。
「だって、あなた……オルガレン団長と、その……恋仲なんでしょう？」
「は……？」
　今度こそ、オズワルドは絶句した。だが、ローズマリーの攻撃は止まらない。
「ああ……自分から身を引くなんて、オルガレン団長……さすが忠義の方だわ」

「いや、待て。何か誤解が……いや、なんかわからんがすべて誤解のような気がしてきたぞ」
「隠さなくてもいいのよ！」
もはやローズマリーにはオズワルドの話などまったく耳に入っていなかった。すっかり自分の世界に入り込み、こぶしを握ってまくし立てている。その勢いに唖然としていたオズワルドだったが、ようやく我に返るとローズマリーの暴走を止めにかかった。
「ちょ、ちょっと待てローズマリー！　お前、勘違いしていないか？　結婚するのは俺じゃないぞ！」
「えっ」
「結婚するのは、エイブラムの方だ」
「え、えええ!?」
目をぱちくりさせて、ローズマリーはやっとそこでオズワルドの顔を見た。彼は、苦虫を百匹くらいまとめて噛み潰したような、そんな顔をしている。
あれ、と首をかしげたローズマリーの耳に、地を這うような低い声の呟きが聞こえた。
「そもそも、なんなんだ……俺とエイブラムが……？」
まったく、たまには気を遣ってやろうと思ったのに、と吐き捨てると、オズワルドはつかつかとテーブルを回り込み、ローズマリーの隣まで移動してくる。
落ち着け、とでもいうように両肩を押すと、彼はローズマリーを長椅子に座らせた。その隣に、オズワルドもどっかりと座り込む。

「つまり、あれか……お前、俺が結婚すると思ったのか？」
「あ……その、私、勘違いを……してたみたい……？」
「それで、なんだって？　俺がエイブラムと……？」
「だ、だって……」
あんなに熱い瞳でエイブラムを見つめていたではないか。それに、噂にだってなっている。混乱して、ローズマリーはあわあわとひじ掛けを掴んだ。すぐ隣に座ったオズワルドから何か危険な香りがして、必死に距離を取ろうとする。
これは、未婚の男女に許される距離ではない。たとえオズワルドが男色で、女性に興味がないとしても、だ。もっと、適切な距離を、と言いたいが、オズワルドの瞳に見つめられると、声が出ない。
「つまりお前は、俺が女とはこういうことができない、と思っているわけだな」
ふ、と耳元に息を吹きかけられて、背筋にぞわっと痺れが走った。その正体がわからずに、ローズマリーはますます混乱する。
「か、隠したいなら、誰にも言わないからっ」
「いいから、もう黙れ」
その言葉と同時に、ローズマリーの顎を掴むと、オズワルドは顔の向きを変えさせた。正面の、すぐ間近にオズワルドの顔がある。
その表情は、これまでローズマリーが見たこともないほど真剣で、そして深い青の瞳には激情が

宿っていた。
「それで、二人きりになっても安心しきってたわけか……」
くそ、と吐き捨てると、オズワルドはおもむろにローズマリーの唇に、自分のそれを重ねた。一度離れたかと思えば、二度、三度と繰り返し啄むような口付けを繰り返す。
やがてそれは、だんだんと長くなり、唇を甘噛みしたり、舌先でちろちろと舐めたりし始める。ふる、と身体を震わせたローズマリーを抱きかかえるようにして、オズワルドはふっと甘い息を漏らした。
「ほら、少し、口を開けて」
「あ、なんっ、んっ……」
なんで、と問いかけようとして開いた唇の間から、オズワルドの舌が侵入してくる。味わうかのように、歯列をなぞる舌先の感触が熱い。上顎をくすぐられると、まるで頭に靄でもかかったかのように何も考えられなくなってゆく。いつの間にか背後に回っていた手が背筋を撫でる感触に、甘い疼きが沸き起こった。
「ん、はっ……」
息が苦しい。どうにかして空気を取り込もうと開いた口の端から、飲み込み切れない唾液が伝う。それを指先で拭ったオズワルドが、いったん唇を解放すると、にやりと笑って舐めとった。その姿が、壮絶に色っぽく見える。
「へたくそ。こういうときは、鼻で息をするんだ」

言うが早いか、再びオズワルドの舌がローズマリーの口の中を蹂躙する。くちゅくちゅと唾液をかき混ぜる淫靡な音が響き、中で縮こまっていた舌がつかまった。オズワルドの舌が器用にそれを引き出すと、舌同士を擦り合わせ、吸い上げてくる。
――なんか、変になりそう……
こうして、舌を擦り合わせると、どんどん気持ち良くなってしまう。こんなこと、ローズマリーは知らなかった。でも、オズワルドは手馴れていて、巧みな舌遣いでローズマリーを翻弄してゆく。それが、どこか悔しい。
「ん、ローズマリー……」
合間に囁くオズワルドの声は、今まで聞いたこともないほどに甘ったるくて優しく、そして危険な響きに満ちている。ぞくぞくと沸き上がる甘い痺れに、ローズマリーはもはや抗うこともできずに身を任せた。
ずる、と力の抜けたローズマリーの身体が長椅子の上に倒されて、オズワルドの手が胸元へ伸びたとき――
「やあ、オズワルド。ローズマリーが来ているんだって？」
扉の開く音とともに、そんな声が室内に響いた。同時に、ぴしり、とオズワルドの身体が固まる。そのまま、油のささっていないからくり人形のようにぎこちない動きで、彼は扉の方に目を向けた。
「……あ、あにうえ……」
「おやおや……これはこれは……」

「き、貴様……ローズマリーに何を……ッ」
のんびりとしたクラレンスの声に続いて、ブラッドリーの震え声がする。さすがに呑気なローズマリーでも、この状況がまずいことは理解できた。
しかも、この現場をクラレンスとブラッドリーだけではなく、部屋の外に控えていた侍女や、王太子の護衛騎士にまで見られていたことが、二人にとっては更なる不幸だったと言える。
さすがにこの状況では、どんな言い逃れも通用しない。ましてや、ローズマリーの口から「オズワルドは同性愛者だから」などと言えるわけもない。
こうして、醜聞が広まる前に、と、二人の婚約が決まったのであった。

第二話　婚約披露

「まさか、このような形で……」
自邸の書斎で、当主であるアルフォード侯爵は頭を抱えていた。その手には、一通の手紙が握られている。白地に金のつた模様が入ったそれは、王家からの正式な文書であることを示していた。
その中身にもう一度目を通して、深くため息をつく。すでに両家の間で話し合いが持たれ、同意したことではあった。しかし、正式な文書で通達されれば、新たな感慨が胸のうちに沸き起こってくる。
そうなればいい、と思ったことがなかったわけではない。だが、こんな形で、というのは予想もしていなかった。
それに、と紙面に書かれた内容を思い出して、もう一度ため息をつく。
「仕方がない、仕方がないが……」
かわいい娘の姿を思い浮かべて、アルフォード侯爵は手元の呼び鈴を鳴らす。姿を現した執事にローズマリーを呼ぶように指示すると、椅子に深く腰かけ天を仰いだ。
「お父様、お呼びと伺いましたが」
「来たか」

ローズマリーは、少しだけ申し訳なさそうな顔で父を見た。その手元にある手紙を見て、さらに身体を縮こまらせる。アルフォード侯爵はため息を呑み込んで、冷静な口調で告げた。
「オズワルド殿下と、お前の婚約の通達だ。……式は、三か月後」
「さっ……三か月ぅ!?」
あまりにも早い。目を剥いたローズマリーに、アルフォード侯爵は淡々と告げる。
「すでに、城にはお針子が呼び集められているそうだ。近いうちに城へ行って、採寸と……それから、打ち合わせをすることになっている」
「は、はい……」
「それから、婚約披露は二週間後だ」
精一杯何気ない様子を装って、アルフォード侯爵は娘に向かって爆弾を落とした。ローズマリーの顔が、蒼白になる。
「に、二週間……」
もはや、何かありました、と言わんばかりの日程だ。きっとこれからローズマリーは友人たちに、根掘り葉掘り何があったか聞かれるだろう。
「それから、明日オズワルド殿下がこちらにいらっしゃる。準備しておくように」
父にそう言われ、ローズマリーはしおしおと頷くと、書斎をあとにした。

ローズマリーは、自分の部屋に戻ると、窓際に置いた椅子にへたり込んで外を眺めた。生憎、今日の天気は曇天で、外はうっすらと暗い。まるで今の自分の気持ちのようだ、と思う。
――残念ね、どうやら私は「そちら側」には入れないみたい。
ほう、とため息をついて、ローズマリーは目を閉じた。瞼の裏に、激情を宿した深い青の瞳が浮かんで、身体の奥に得体の知れない熱がともる。
「なんで、あんなことを……」
唇に手を当てて、あのときの感触を思い出す。彼の唇は、柔らかくて熱かった。それが、まるでローズマリーの唇を食べるかのように覆いつくして――
そこまで思い出して、ローズマリーは慌てて首を振った。
「ああまでして、隠したかったのかしら。……そうよね、だって、オルガレン団長は結婚されるのだし……もしもあんなことがバレでもしたら、きっとお困りになるのよね」
そう独り言ちて、ローズマリーは頷いた。つまりはそういうことだろう。
「オズワルドだって、本当のことを知っている私の方が、やりやすいでしょうね……」
もう一度大きくうん、と頷いて、ローズマリーは勢い良く立ち上がった。とにかく、明日の用意はせねばならない。
幼馴染とはいえ、王族が邸を訪問するとなれば、それなりの恰好で出迎えなければ。
「……少なくとも、相手はオズワルドだもの。なんでも言い合える相手に嫁げるだけ、マシだと思わなきゃだめよね」
仲睦まじい結婚生活、とはいかないだろうが、抑圧された結婚生活よりはいくらかマシだろう。

たとえそれが、夫の秘めたる恋の隠れ蓑になるとしても。
問題はオズワルドだ。感情に任せた行動の末にこんなことになってしまって、彼はいったい今どんな気持ちでいるのだろう。そして自分もどんな気持ちで準備に臨めばいいのか。
オズワルドがあんなことをしでかさなければ、結婚する羽目になどならなくて済んだ。だが、非はオズワルドばかりにあるわけではない。自分だって二人きりになってしまうことになんの異も唱えなかったし、彼の隠し事を暴こうとしてしまったのだから。
そう思い直してベルを鳴らし、侍女を呼びながらも、ローズマリーはどこかもやもやした気持ちを捨てきれずにいた。

オズワルドがアルフォード邸を訪問したのは、翌日の午前中のことである。事前に連絡をもらっていたアルフォード家の面々は、玄関ホールに揃って彼を出迎えた。
だが、ローズマリーはそのオズワルドのいでたちを見て目を丸くする。
正式な場でしか着用を許されない濃紺の魔術騎士の正装に、真っ赤な薔薇の花束。きっちりと撫でつけられた髪は一筋の乱れもなく、凛々しい顔のラインがすっきりと見えている。その黒い髪を結んでいるのは、薄い青色のリボンだ。
「オ、オズ……」
――これは、まさか……？
絶句したアルフォード家の面々に向かって、オズワルドは深く一礼した。彼の名を呼ぼうとして

いたローズマリーも、そのまなざしの真剣さに口を閉ざす。
「……この度は、順番が狂ってしまったことを深くお詫びいたします。改めて、皆様の前で」
そのまま、オズワルドはすっと膝を折ると、ローズマリーの前に跪いた。
「ローズマリー・アルフォード嬢。どうか、私と結婚してください」
まっすぐに向けられた視線は、痛いほどに強い。気圧されて一歩後退りそうになったローズマリーの背中を、ブラッドリーが優しく支えてくれる。
ローズマリーは、オズワルドの瞳から視線を逸らすことができなかった。まるで縫い留められたかのように、身体がそれ以上動かない。
まさか、こんな正式なプロポーズを受けるとは思ってもみなかった。もはや、二人の結婚は決定事項なのだから。しかも、あのオズワルドが、こんなに真剣な表情で、ローズマリーに跪くことなど考えてもみなかった。
「ローズマリー」
なかなか口を開かないローズマリーに焦れたのか、オズワルドがしっかりと視線を絡ませたまま名前を呼ぶ。それはどこか、懇願するような響きを持っていた。
「あ……」
なんとか言葉を返そうと思うものの、唇が震えて声が出ない。その背中を、ブラッドリーが優しく押した。
「ローズマリー、お返事を」

耳元でそう囁かれて、やっと呪縛が解ける。世界が感覚を取り戻し、差し出された薔薇の花束からは、芳醇な香りが漂っているのがわかった。

――これ、オズワルドの庭の薔薇だわ。

そっと手を伸ばして、その花弁に触れる。薔薇の花は、朝摘んだばかりなのだろう。少しだけ湿っていて、瑞々しい。

その薔薇は、オズワルドが手ずから世話をしている特別なものだと教えられたことがあった。意外なことに、オズワルドは園芸が趣味なのだ。中でも薔薇の花を育てるのはなかなか難しく、何度も失敗をしたと恥ずかしそうに話してくれたのを覚えている。

「――お受けいたします」

きっと、オズワルドは自分を大切にしてくれるだろう。仲睦まじい、とまではいかなくても、不幸な結婚生活にはならないはずだ。

秘めたる恋の隠れ蓑、良いではないか。

立派にその勤め、果たしてやろうではないか。

花束を受け取って、ローズマリーは微笑む。柔らかく花束を抱きしめるその姿を、オズワルドが眩しそうに見つめていたことには、ローズマリーは気が付かなかった。

その後、アルフォード侯爵と話をしたいというオズワルドが、父と連れ立って書斎に消えていくのを見送る。妙な緊張感から解放されて、ローズマリーは、ふうっと大きなため息を漏らした。

なんだかわからないが、とても緊張してしまった。薔薇を自分の部屋に活けてくれるよう侍女に

頼むと、応接室で温かいお茶を淹れてもらう。

添えられたクッキーを一つ摘んで、ローズマリーはふと先日のことを思い出した。オズワルドの部屋で出されたのも、これと同じクッキーだ。

実を言えば、ローズマリーはクッキーに目がない。特にこの店のものが好きで、常にアルフォード邸には常備されている。それとまったく同じものが、オズワルドの部屋でも準備されていたのだ。

「……たまに、変に優しいのよね、オズワルド」

「まあ……そうだな」

同じくお茶を飲んでいたブラッドリーが、苦笑して肩をすくめた。その視線に呆れが滲んでいるのは、ローズマリーの気のせいではないだろう。

特に、オズワルドの部屋で起きたことが見つかってから、その傾向が強い。

浅はかなことをしでかした妹に対して呆れているのだろうな、と考えて、ローズマリーは身を縮めた。

「……ごめんなさい」

「謝るようなことではない」

まったく、と一言こぼして、ブラッドリーもクッキーを手に取る。

「お前が王子妃か……これでまた、クラレンス殿下の周りも騒がしくなるな」

「え？」

首をかしげるローズマリーに兄は説明を始めた。王太子であるクラレンスには、現在婚約者はい

ない。だが、弟王子が結婚することで、またひっきりなしに縁談が持ち込まれるだろう。
そこまで話して、ブラッドリーはため息をついた。そういうことを考えられる時期ではないという。
三年前に二十を迎えると同時に立太子されたクラレンスは、将来を見据えて今までよりも多くの仕事を割り振られて多忙なのだ。
「だからまあ、縁談はご遠慮願っていたのだが……」
「それについては、申し訳なく思っている」
背後から声がして、ローズマリーは思わず振り返った。少しだけ疲れた様子のオズワルドが、ちょうど応接室に案内されて姿を現したところである。
ブラッドリーは、そんなオズワルドの姿を見て目を細めた。口元に笑みを浮かべると、どうぞ、と声をかける。
彼は、手近なところにあった椅子に腰を下ろすと、運ばれてきたお茶を一口すすって息を吐く。その姿を、ローズマリーは黙って見つめていた。口を開いても、なんと言っていいのかわからなかったからだ。
だが、そんなオズワルドにブラッドリーはからかうような声をかけた。
「随分絞られたみたいですね」
「これくらいのことは、もちろん覚悟してきましたから」
「殊勝なことで」

はは、と声を上げて、愉快そうにブラッドリーが笑う。それを神妙な顔つきで見ると、オズワルドは再びお茶に口をつけた。
しばらくの間、応接室に沈黙が満ちる。それを破ったのは、意外なことにオズワルドだった。
「ローズマリー、少し話がしたい。いいか？」
「はっ……話って何よ」
急に声をかけられて、思わず声が上ずってしまう。そんなローズマリーに、オズワルドは一瞬目をぱちぱちさせると、笑い出した。
「誓って変なことはしない。そうだな、庭でも案内してくれ」
「庭って……もう何回も来ているじゃない」
ローズマリーの返答に、ブラッドリーが噴き出す。当のオズワルドは、微妙な顔つきでローズマリーとブラッドリーの顔を交互に見た。
——何がおかしいのよ。
笑われて憤然としたローズマリーが、頬を膨らませる。その向かいで、いやいや、と首を振りながら、ブラッドリーが肩を震わせてオズワルドに加勢した。
「ローズマリー、いいから行ってきなさい。殿下は、二人で話がしたいそうだ」
あ、と間抜けな顔をしたローズマリーに、オズワルドが手を差し出す。その頬が少し赤くなっているのは、ブラッドリーにずばっと指摘されたのが恥ずかしいからだろう。
こんな顔を、そういえば前にも見たことがあるような気がする。

あれは、いつだったか――
「ほら、ローズマリー」
「あ、うん……じゃなくて、はい」
いい加減、言葉遣いも改めなくてはならないだろう。いくら今まで気安くしていたとはいえ、相手は王子。そして、三か月後にはローズマリーの夫になるのだ。
だが、そんなローズマリーに、オズワルドは変な顔をした。
「調子が狂う……」
そうぼやいたオズワルドと、唇を尖らせたローズマリーの姿を、口元を押さえたブラッドリーは黙って見送った。

昨日は曇天だったが、今日は打って変わって晴天だ。少しずつ高くなった陽を浴びて、庭の植え込みは爽やかな色を見せている。
アルフォード邸の庭は広い。走り回って遊んだ子どもの頃を思い出して、ローズマリーは微笑んだ。
ローズマリーが王城へ行くことの方が多かったが、オズワルドがここを訪れた回数もそれなりに多い。あの頃は、オズワルドが王子だということは知っていても、あんまり関係がなかった。
一度、ここでオズワルドと喧嘩になって、ローズマリーが大泣きしたことがあった。何が原因だったかはっきりとは覚えていないが、ローズマリーが何気なく口にした一言に、オズワルドが怒り出したのだ。
確かに、それまでも喧嘩をすることは多々あったが、ローズマリーが泣くほどの喧嘩はあれが初めてだったように思う。
それからではないだろうか。オズワルドが、たまにローズマリーに優しく接するようになったのは。
だがまあ、基本的には二人が、会えば舌戦を繰り広げる仲であることに変わりはなかったのだけれども。
そんなことを思い出していたローズマリーは、オズワルドが足を止めたことに気が付かなかった。
「なあ、ローズマリー、お前本当にいいのか？」
「え？　なあに、今更……まあ、オズワルドは不本意でしょうけど……」
改まった声音のオズワルドに困惑して、ローズマリーは背後を振り返った。その先で、オズワルドは妙に真剣な表情をしている。
「俺は別に……」
「いいのよ、わかっているから、私には隠さなくても。あなた、エイブラム団長が好きなんでしょう？」
「は……？　お前、まだそんなこと言ってんのか？」
オズワルドの声にわずかに怒気が籠る。だが、ローズマリーはそれには気付かず、肩をすくめて続けた。

「ああ、いいのいいの。ま、お互い不本意ではあるけれど、こうなったら仕方がないでしょう？」
「仕方がない……だと？」
オズワルドの瞳が不穏な輝きを帯びる。それに気圧されて、ローズマリーは一歩後ろへ下がった。
「お、怒らせたのは悪かったわ……でも、オズワルドがあんなこと……いえ、逃げることもできたのに、オズワルドが幼馴染のよしみできちんと求婚してくれたのは、ありがたいと思っているわ。だからまあ、隠れ蓑になるくらいは……」
これは確かにローズマリーの本心でもある。人の口に戸は立てられない。隠ぺいしても、どこかから話は漏れるだろう。
男性であるオズワルドは、多少の火遊びは寛大な目で見てもらえる、それどころか、勲章のようにすら思ってもらえる。一方で、女性であるローズマリーは、ふしだらであるという烙印を押され、まともな結婚など望めなくなるのだ。
だが、オズワルドは何故か怒ったような顔をして、話の途中で一歩踏み出してきた。
「お前は、そう思ってるんだな？」
思わず一歩下がろうとして、ローズマリーはそれに失敗した。何故なら、オズワルドがローズマリーの腕を捕まえているからだ。
「――俺は、これを形だけの婚姻になんてする気はない。お前には、俺の子を産んでもらう」
きっぱりとそう断言したオズワルドの瞳が、ギラリと光る。
「えっ……」

「……今日はこれで帰る。とにかく、結婚を承諾したのはお前だ。逃げるなよ」
呆然と立ち尽くすローズマリーをその場に残して、オズワルドは帰っていった。

その日から、ローズマリーはオズワルドに会っていない。正確には、忙しくて会う暇がない。
ドレスの制作のために頻繁に王城に足を運んではいるのだが、オズワルドは初日にちらりと顔を出しただけだ。一つ二つお針子に指示を出すと、ローズマリーと会話をすることもなくその場をあとにした。
だが、婚約者に対する義理なのだろう。贈り物だけは三日とあけずにローズマリーの元に届けられる。
その一つが、今ローズマリーの目の前にあった。
「これはこれは、また……」
どこか楽しげですらある口調でそう呟くと、ブラッドリーはにやにやとした視線をローズマリーに向けた。その視線を受けて、ローズマリーはいたたまれない気分になる。
小さな箱におさめられているのは、一対の深い青色の貴石をあしらったイヤリングだ。そう、それはちょうど――
「まるでオズワルド殿下の瞳のようじゃないか」
「……婚約者に対する礼儀でしょ」
ぱちん、と箱のふたを閉めて、ローズマリーはにやつく兄を睨みつけた。その兄の手元には、オ

ズワルドが直筆でしたためたカードがある。
「婚約披露には、これをつけてくるように、だってさ」
「……そう」
「見せびらかしたくて仕方ないんだろうなあ」
くっくっく、と笑いながら、ローズマリーの手にカードを渡す。それを眺めたローズマリーは、何気なくひっくり返して記された一文に気付いて、一気に顔を赤くした。
「こっこれっ……オ、オズワルドったら、いつの間にこういう……」
「いやあ……愛だな、愛」
「ほんっとに、そういうのじゃないですからね！」
そう叫んで、ローズマリーはばんとカードを机の上に置いた。そこにはこう記されている。
『愛しの婚約者、ローズマリーへ』
笑いながら部屋を出ていくブラッドリーの後ろ姿にじっとりとした視線を送り、ローズマリーは熱くなった頬を両手で挟み込む。自分の手が、やけにひんやりと感じた。
「……ほんと、そういうのじゃないでしょ……」
呟いた言葉には力がない。へなへなと崩れ落ちるように座り込んで、ローズマリーは机の上の箱をぼんやりと眺めていた。
そうしている間にも、日時は容赦なく過ぎ去っていく。
二週間など、あってないようなものだ。心の準備も整わぬうちに、ローズマリーは婚約披露の日

立ち読みサンプルはここまで

を迎えてしまった。
「……ちゃんと、つけてくれたんだな」
「つっ……つけて来いって言ったのは、オズワルドでしょう……」
今日のオズワルドは、銀糸の刺繍の施された濃紺のジュストコールを身にまとい、先日アルフォード邸を訪れたときのようにきっちりと髪を撫でつけている。伸びた髪をまとめるリボンも、そのときと同じもの。
それが、ローズマリーの瞳の色と同じだと気が付いたのは、あの日オズワルドが帰ってからだ。
対するローズマリーの装いといえば、深い青のドレスに、同じ色をしたイヤリングをつけている。もちろん、オズワルドから送られたものだ。首元に飾られているのは、薄い青から深い青へのグラデーションが美しいネックレス。これは、父から結婚する娘への贈り物だ。
それに手を添えると、オズワルドはくすりと笑った。
「さすがアルフォード侯爵、良いセンスをしている」
正直、やりすぎではないかと思うほどの装いに、ローズマリーはいたたまれない気持ちになる。
「こんな……」
「やりすぎくらいがちょうどいいだろ」
こともなげにそう言って、オズワルドはローズマリーを抱き寄せた。思わぬ行動に、ローズマリーの心臓がどきんと大きく跳ねる。
「一年の婚約期間が待てなかった大馬鹿王子の婚約者だ。それくらいの恰好の方が、説得力が